

学生が伸びる学び方

## 大学選択

## 新たな視点



### 今号の視点

# 学生が身に付けるべき力を明示し 教育効果を高めるプログラム

大学教育の質の保証が叫ばれる中、教育目標や身に付けられる力を明示する大学が増えている。明示した教育目標に基づく教育を実践し、客観的に評価することで、学生の意欲や教員の教育力の向上を図ろうとしている取り組みにスポットを当てた。

### 身に付く力と評価法を明確 に示し、教育の質を保証

2008年7月に教育振興基本計画が閣議決定されたことを受け、大学ではさまざまな教育改革が進んでいる。その中で、「教育の質保証」は大きな課題の一つである。大学の理念や社会のニーズなどを基に、どのような学生を入学させ（アドミッションポリシー）、どのようなカリキュラムで教育活動を行い（カリキュラムポリシー）、どのような力を付けた学生の輩出

を目標とするのか（ディプロマポリシー）を設定する必要が出てきている。入学から卒業までの各段階の目標と活動を明確にし、それぞれの成果を測ることで、教育の質を保証しようというわけだ（図1）。

高校現場においては、入り口である「アドミッションポリシー」だけでなく、「カリキュラムポリシー」や「ディプロマポリシー」を確認し、大学入学後に「身に付く力」や、それらを「学ぶ過程」を意識した進路指導が今後ますます重要になる。

### 少人数・対話型授業で 社会で必要な10の力を養う

東京女学館大  
「卒業成長値を高める『10の底力』」

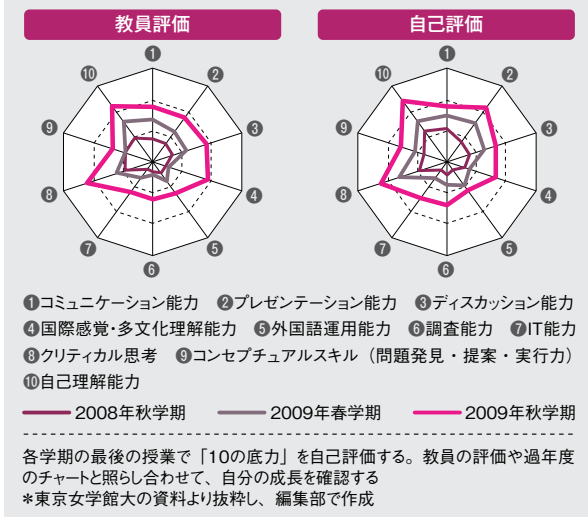
東京都町田市にある東京女学館大は、短大を廃止して02年度に設置された4年制の単科大学（国際教養学部）である。卒業までに学生に身に付けさせたい力を「10の底力」（図2）と定義し、20人以下の徹底した少人数・対話型授業（開講科目の9割）を通して、その習得を支援する。08年度に「卒業成長値を高める『10の底力』」として、

図1 大学の内部質保証サイクル



\* Benesse 教育研究開発センター作成

図2 東京女学館大「10の底力」とレーダーチャート



「同じ授業でも、目指すべき力が明確になってきているのといかないのでは、学生の取り組み方や意欲は大きく変わります。キャリアを描いた上で履修するという意識が希薄であった学生でも、一度将来の展望を持たば、そこに向かってまい進する力があります。将来展望と科目選択が結び付くことで学びへの意欲も高まる」と期待しています」

各科目が目標とする二つの力は、各学期終了時に学生自身と教員が3段階で評価する。全履修科目の力のバランスはレーダーチャートで示され、伸びた力や不足している力、自己評価と教員評価の差が一目で分かる(図2)。

文部科学省の「学生支援プログラム」にも選定された。

プログラム最大の特徴は、約200の基礎科目・専門科目を通して「10の底力」を身に付けさせる点にある。一般的に、「10の底力」で掲げられた能力は教養科目で育成する大学が多い。同大のように、通常の授業において、専任、非常勤にかかわらず、すべての教員が一丸となって取り組んでいる例は珍しい。

シラバスには授業で特に身に付けられる力が二つずつ示され、学生は自分が学びたい科目と、伸ばしたい

力を考えながら履修科目を決める。全シラバスが掲載された「授業案内」には全科目の「10の底力」のマップング表があり、身に付けたい力から科目を探すことも可能だ。

目指すべき力を明確にするメリットを、GP推進室長の加藤千恵教授は次のように説明する。

「同じ授業でも、目指すべき力が明確になってきているのといかないのでは、学生の取り組み方や意欲は大きく変わります。キャリアを描いた上で履修するという意識が希薄であった学生でも、一度将来の展望を持たば、そこに向かってまい進する力があります。将来展望と科目選択が結び付くことで学びへの意欲も高まる」と期待しています」

### 目指す力を明記することで 学力保証の重要性を実感

プログラムのもう一つの特徴は、学生自身がキャリアプランを考えながら伸ばしたい力を選べる点だ。

「大学としては、必ずしも『10の底力』すべてを均等に伸ばす必要はないと思っています。就きたい職業に求められる力を意識して科目を選ぶ、あるいは身に付いた力を必要とする職業を考えると、自分のキャリアプランにつなげてほしいと考えています」(加藤教授)

進路と「10の底力」を関連付けて科目選択をする学生は増えている。4年生の黒田梨沙さんは、「入学直後は漠然と『外国語運用能力』と『コミュニケーション能力』を生かせる仕事に就きたいと考えていました。インターシップを体験し、課題を発見して解決する力が足りないと分かり、次の履修から『コンセプトアルスキル』も意識して科目を選びました。レーダーチャートで不足している力がはっきり分かったので、早めに修正が出来ました」

教員にとっては、指導の方向性が具体化された。「生徒指導論」「教育方法論」などを担当する黒川雅子専任講師は、次のように述べる。

「これまでは、少人数・対話型授業を行うだけで『学生にプレゼンテーションやディスカッションをさせている』と思っていました。しかし、『ディスカッション能力を付けた』といえるようになるためには、予備知識の調べ方、メモの取り方や意見提示の仕方など、具体的なスキルを身に付けさせなければなりません。授業を通して身に付く力を明確にしたことで指導すべき内容が具体的に、授業に対する意識も大きく変わりました」

身に付けさせる力を明示することで、新たな授業方法を教員一人ひとりが意識し始めたのだ。08年度から、学生のコミュニケーション能力やディスカッション能力を高める工夫、効果的なプレゼンの仕方などさまざまなFD(\*1)を通して指導力の向上に努めている。

今後は就職だけでなく、就業の継続や子育てなどのライフイベントを乗り越える上で必要な力を身に付け

\*1 ファカルティ・ディベロップメント(Faculty Development)の略。授業の改善や向上を目的とする教員の職能開発

られるような体系的なプログラムを構築する予定だ。

## 観点別に到達目標を明記し力の伸びを数値で把握

広島大  
「到達目標型教育プログラム」

広島大では、学生が卒業までに身に付けておくべき知識や能力を到達目標（目指すべき卒業生像）として明記することで、学生の意欲、教員の指導力向上を目指している。06年度に導入した到達目標型教育プログラム「HIPROSPECTS®（ハイプロスペクツ）」は、従来の「秀・優・良・可・不可」という5段階の成績評価に加え、授業計画に定められた到達目標に対して、どの程度到達しているのかを学期ごとに確認し、適切な学びを支援するシステムだ。

広島大では、学部・学科を卒業するための教育課程はプログラム単位で設けられている。学士号を取得するための教育課程が主専攻プログラム（入学時または2年次以降に分属）で、ここでの教育の質保証がハイプロスペクツの目的である。

到達目標は主専攻の各プログラム

でそれぞれ定められ、そのために必要な力は、「評価項目」として具体的に明示されている（図3）。評価項目は、「知識・理解」「知的能力・技能（情報収集能力や解析能力など）」「実践的能力・技能」「総合的能力・技能」の4観点で分類され、その観点には、更にプログラムごとに詳細な評価項目が掲げられる。

評価項目は1項目につき1科目という場合もあるが、基本的に複数の科目で一つの項目を測る。総合科学部・地域文化プログラム3年の近藤佳那子さんは、「科目間のつながりが明確になるので、学ぶ地域や文化は違っているけど、実は底辺の部分でつながっていることが意識できます」と感想を述べる。

### 学生の自己評価により更なる教育改善を目指す

各評価項目は、「非常に優れている」「B」「優れている」「M」「基準に達している」「T」「基準に達していない」「N」の4段階で評価する。生物生産学部分子細胞機能学プログラム4年の宮井智浩さんは、「GPA

図3 主専攻プログラム詳述書「地域文化プログラム」(抜粋)

#### 1 プログラムの到達目標

- ① 現代の地域に根ざす諸問題への基本的な認識と、その歴史的、地理的、文化的背景を理解する
- ② 世界諸地域の問題を分析し、解決への道を探求する
- ③ 具体的な地域の諸問題、テーマについて、①②を統合する論文を作成し、口頭でも発表する

#### 2 プログラムによる学習の成果

- 知識・理解
- ① 広域アジアについての知識・理解
  - ② 広域欧米についての知識・理解
  - ③ 複数の地域・地域間関係や文化交流についての知識・理解
- 知的能力・技能
- ① 諸学問領域の研究成果、文献を読み解くこと
  - ② 研究の基礎となる資(史)料を収集・整理すること
  - ③ 地域調査に従事し、調査結果を報告すること
  - ④ 研究対象に関わる言語について理解すること

#### 【到達目標評価項目と評価基準】

	非常に優れている (Best)	優れている (Modal)	基準に達している (Threshold)
① 広域アジアについての知識・理解	特定の地域について豊かな知識を持ち、さまざまな事象を深く理解できる	特定の地域について基礎的な知識を持ち、さまざまな事象を十分理解できる	特定の地域について基礎的理解が出来る

\* 広島大作成の資料を基に編集部で作成

(\*2) は良くても、到達度評価はいま一つということは珍しくありません。知識は身に付いているけれども深く理解していないことが分かれば、学習に対するアプローチを変え、きっかけにもなります。必要な力や観点が具体的に示されたことで、授業や実験の狙いが分かりやすくなりました」と話す。

教員にとってもメリットは大きい。入学センター長の高谷紀夫教授は、「到達度評価の変化を見れば学生の力の推移が一目で分かるため、3、4年生で初めて指導を受け持つ

場合でも、学生の力を踏まえた卒業研究指導が出来ます。また、他の教員が同じ学生をどのように評価しているのかも分かるため、評価が従来に比べてより客観的につけられるようになりました」と述べる。

到達度評価はあくまで学生が自身の力の伸びを確認するための指標として位置付けられ、卒業判定には影響しない（卒業判定は従来通り修得単位数で行う）。通常の成績証明書のような文書も発行されない。現段階では、学生とチューター教員が到達度の結果を見ながら、その原因を

\*2 グレード・ポイント・アベレージ(Grade Point Average)の略。各科目の成績を数値化して算出する学生の単位当たりの成績評価値

リーダーチャートで  
足りない力を意識



東京女学館大  
国際教養学部3年  
**千石 桐子**  
(東京女学館高校卒業)

科目履修で「10の底力」を意識し始めたのは2年生になってからです。1年次は必修科目が多く選択の自由が少ないのであまり気にしませんでした。1年次の終わりにリーダーチャートを見て、足りない力は何かを意識するようになりました。

履修前は、「英語の演習」Ⅱ「コンセブチュアルスキル」のように、なぜこの力につながるのかと疑問に思う科目もありましたが、実際に授業を受けてみると、英語のニュースを見たり人種問題について考えたりと、幅広い課題に取り組む中で力の伸びを実感できました。今は認定心理士の資格取得を目指しているので調査能力やクリティカル思考を身に付けられる科目を多く履修していますが、インターンシップで貿易の仕事にも興味を覚えたので、国際感覚・多文化理解の科目も取りたいと考えています。「10の底力」を通して、自分自身の課題を把握し、伸ばしたい力を具体的に思い描けるようになりました。自分の成長を実感したい人にはぴったりのプログラムだと思います。

授業やレポートで  
意識すべき観点が明確に



広島大学院総合科学研究科  
博士課程前期1年  
**加茂川 侑享**  
(アイルランド・ロッキウエルカレッジ卒業)

GPAでは成績の全体像は分かりませんが、身に付いた力とそうでない力を客観的に見られませんか。ハイプロスをベクトルでは、求められる力が明示されているため、授業やレポート提出の際に意識すべき観点が明確になりました。「研究成果や資料を読み解くことが出来る」という評価項目の評価が下がった時は、次のレポートでは資料の検索から精度を高めなければと痛感しました。

ハイプロスベクトルは科目選択の際の判断材料にもなります。総合科学地域文化プログラムには、広域欧米と広域アジアの各分野がありますが、ある時、広域アジア分野の評価で5段階評価での成績は高いのに到達度評価が良くないことがありました。その時、私の関心がヨーロッパに偏っていたことに気付く、次の科目選択はアジア系の科目を多く履修するよう意識しました。大学院に進み、更に高度な研究を志すならば、自分を客観的に見る目が必要です。ハイプロスベクトルを活用して自分の強み、弱みを見極める目を養いたいと思います。

明らかにしたり次回に向けた改善策を話し合ったりする程度で、学生が日常的に意識する場面は少ない。

そこで、更にこの取り組みの効果を高めるため、10年度前期から、教員による評価に加えて、学生自身に到達度を評価し、相互に確認する仕組みを導入した。学生の認知度向上を図ると同時に、自分を客観的に見る力を付けさせるのが狙いだ。

これは、授業改善に向けた布石でもある。学士課程会議長の小澤孝一郎教授は、「学生と教員の評価に食い違いがあるとすれば、教員が学生に対して身に付けるべき力について意識付けをしていない、あるいは授業がそういう力を身に付けさせるものになっていない可能性があまりあります。学生の評価を通して具体的な指導改善に結びつくヒントが出てくるのではないのでしょうか」と期待する。授業内容の変更、あるいは科目の設置や統廃合などカリキュラム改編につながる可能性もあるという。

育成したい人材像を明確にし、そのための教育プログラムを客観的に評価する。大学教育は転換期に差し掛かっている。

まとめ

学生が自分自身の力を  
意識できる仕組みに注目

能力向上のために大切なことの一つは、身に付けるべき力を自分自身で意識することだ。学習を客観的に振り返り、軌道修正と意欲の喚起が行われる仕組みが構築されていることも重要である。東京女学館大、広島大のような取り組みは今はまだ少数ではあるが、愛媛大や山口大、立命館大など、教育の質保証に正面から取り組む大学は徐々に増えている。育成したい学生像に対して、カリキュラムがそれを保証するものになっているか、そのための道筋は明示されているか。漫然と4年間を過ごし、力が伸びたという実感を得られないまま卒業していくことのないよう、大学調べやオープンキャンパスの際に確認してみる必要がある。

ご意見・ご感想をお寄せください

◎ 今回の内容に関するご感想やご意見、今後取り上げてほしいテーマなど、編集部にお寄せください。

e-mail: view21\_since-1975@mail.benesse.co.jp